法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

The Wild Palms : パトスからエートスへ

新井, 透

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
69
(開始ページ / Start Page)
137
(終了ページ / End Page)
148
(発行年 / Year)
1989-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005399

Hosei University Repository

The Wild Palms—パトスからエートスへ

新井　透

I

The Wild Palms は "Wild Palms" と "Old Man" という2つの物語が交互に書かれ，いわば「二重小説」の形式をとっている。かつてオドンネルはこの2つの物語には相互の関連性にとぼしく "unity" がないという理由で *The Wild Palms* は技法上失敗作であると決めつけた[1]。またこの小説が出版された当時，多くの文芸誌の書評にはメロドラマ的色彩が濃すぎると酷評されていた[2]。しかし最近では *The Wild Palms* のタイプ原稿にあった最初のタイトルである "If I Forgot Thee Jerusalem" が編集者の意向で現在のタイトルに変更されたために主題があいまいになったとして，「詩編」137章をパラフレーズした原題の中に主題の一貫性を認めようとする意見がマクハニーらによってなされ[3]，*The Wild Palms* も正当な評価を与えられるようになった。

フォークナーはヴァージニア大学で学生の質問に対して次のように答えている。

> The story I was trying to tell was the story of Charlotte and Harry Wilbourne [*The Wild Palms*]. I decided that it needed contrapuntal quality like music. And so I wrote the other story simply to underline the story of Charlotte and Harry. I wrote the two stories by alternate chapters. I'd write the chapters of one and then I would write the chapter of the other just as the musician puts in——puts counterpoint behind the theme that he is working with.[4]

上記の引用にもあるようにフォークナーはシャーロットとハリーの物語を強

Hosei University Repository

調するために，すなわちメインテーマを浮き彫りにしようとして意図的に，何ら関連性がないように思われる別の物語をすぐ後につけ加えている。他の彼の作品，たとえば *Light in August* と比較した場合，ジョークリスマスのストーリーとリーナ・グローブのストーリーとの間には複雑な交錯があるが，*The Wild Palms* にはそれがみられない。独立した2つのストーリーが並列された状態で相互の関連性がない。しかしフォークナーは対位法という言葉を用いているが，相互の反響（"inter-reflection"）を感じとることができる。つまり喜劇と悲劇，生と死，自然と都市，女への憎しみと愛といったいくつかの対立する概念が互いに反響し合っている。

また対立ばかりでなく2つの物語に共通した概念も認められる。ハリーがシャーロットの夫から逃亡を示唆された時拒否した行為と背の高い囚人が妊婦を置き去りにして逃亡できたにもかかわらず，彼女を救出して刑務所に戻ってくる行為には共通の倫理感がある。二人は社会的にみれば敗北者のレッテルを貼られるかも知れないが，彼らの敗北は崇高なものへと高められる。イーハブ・ハッサンは20世紀文学における敗北に対して意義を認め，次のように述べている。

> It can be observed at closer range in the image of adolescent heroes, the creation of writers from Dreiser to William Faulkner, whose encounter with experience confers less value on worldly triumph than on defeat. That defeat creates its own peculiar values——they are the ruling values of recent fiction.[5]

ハリーや囚人は Hemingway の *The Old Man and the Sea* に登場するサンチャゴ老人のように気高い悲劇的精神を獲得する。一連の今までの "Yoknapatawpha Saga" ではクェンティン・コンプソンやジョー・クリスマスに見られるように苦悩のあくなき追求が描かれているが，*The Wild Palms* は *Go Down Moses* や *Intruder in the Dust* 等の1940年代以後の作品への橋渡し的な役割を持っているように思われる。すなわち *The Sound and the Fury* や *Absalom, Absalom!* にみられる運命に対する絶望的な闘争から肯定的な様相に傾斜していく。ハリーは苦悩の世界から普遍的な価値を意識しつつある。

ギリシア語にパトス（pathos）という語があるが，元来は倫理を意味するエ

Hosei University Repository

ートス（ethos）との対比で用いられた語で，情熱，情念という意味やアリストテレスの『形而上学』第5巻によれば苦悩，受難（passion）という意味がある[6]。

フォークナーの今までの作品ではパトスの世界が圧倒的であったが，*The Wild Palms* においてパトスからエートスへと移行を見ることができる。すなわちハリー・ウィルボーンという主人公を通してパトスの世界を克服して倫理性（エートス）を獲得する姿を見ることができる。

II

ハリー・ウィルボーンが友人マコードに語る次の言葉は現代人の状況の不安を雄弁に表わしている。

> There is no place for it [love] in the world today, not even in Utah. We have eliminated it. It took us a long time, but man is resourceful and limitless in inventing too, and so we have got rid of love at last just as we have got rid of Christ.[7]

ハリーは物質文明によって愛も信仰も失なわれてしまったと考える。物質文明のシンボルは金である。ハリーとシャーロットの愛も金によって翻弄されている。彼が1,278ドル入ったサイフを遇然拾わなかったならば2人の愛はとっくに終っていたであろうし，彼らにもっと金があったらユタ州のような寒いところに行かずにすんだであろう。金は2人の愛の間にたえずしのびこんでくる。ハリーは貧しいインターン時代，恋人と無縁の時代次のように独白する。"I have repudiated money and hence love." (p. 27) 一方シャーロットはハリーとシカゴへ逃避行する前に彼に次のように言う。

> .....the second time I ever saw you I learned what I had read in books but never had actually believed: that love and suffering are the same thing and that the value of love is the sum of what you have to pay for it and any time you get it cheap you have cheated yourself. (p. 37)

Hosei University Repository

2人とも愛と金とは密接な関係にあると考えているが，特にシャーロットにとって「愛の価値はそのために支払わねばならない代償の額だ」と考え，お金は愛のメタファーになっている。

次に Harry Wilbourne の名前について考えてみたい。なぜなら Hawthorne のいろいろな小説にみられるように名前がアレゴリカルな意味を持つと考えられるからである。will には遺言とか情熱（desire）という意味もある。すなわちウィルボーンは父の意志とシャーロットへの愛の欲望という二重の象徴的な意味を負っている。ハリーはシャーロットに出会わなかったならば“Wild Palms”に登場するニューオリンズの中年医師のように，インターンを終え父の遺言どおり，ピューリタン的な禁欲主義者で平凡なブルジョワになっていたであろう。シャーロットとの出会いによって，つまり彼女に対する情熱や欲望（will）のためにハリーはすべてを失ってしまう。父の遺言（will）に反して医師の免許を途中で断念し，また義姉への送金もやめて，シャーロットのように家族の絆も断ち切る。このように父の意志に反する行為を行なうことは大人になるというでもあり，イノセントな世界から経験の世界に入る（イニシエイション）ということでもある。また父の意志は神の意志を暗示していて，現代人が神を捨てた（“repudiate”）と考えることができる。故に前に引用したハリーの実存主義的な意味合いを含んだ言葉は現実味を帯びてくる。

Malamud の *A New Life* という小説にレヴィンという主人公が出てくる。彼は社会にうとく（すなわち社会から疎外されている），へまばかりする道化的人物であるが，誇りを捨てず，自己の自由を放棄して愛を選ぶ。ハリーもそうだが，レヴィンも姦通という社会の掟を破り，追放されてしまう。二人とも悲劇的な運命を通して，愛と自己発見という個人的な価値に目を向ける。レヴィンはハリーのように愛する女を失わずにハッピーエンドで終っている点で差異が見られるが，共に現代人の苦悩を象徴している。

ハリーの愛人シャーロット・リトンメイヤーはフォークナーの初期の小説に登場する女性たち——*Mosquitoes* のミス・ジェイムソンやパトリシア，あるいは *Soldier's Pay* の中のマーガレット・パワーらと同様，過剰なロマンティシズムの世界に没頭する。また *The Wild Palms* が出版された1939年当時，フォークナーはずっとハリウッドの映画会社で仕事をしており，ミータ・カーペンターという南部の女性とそこで知り合い，深い仲になっていたことは有名である。その頃のフォークナーはエステラと結婚し，娘のジルがいたが，夫婦

Hosei University Repository

仲は冷え切っていて，ミータとの関係はハリーとシャーロットの関係と同様，社会通念では許されない間柄になっていた。したがってシャーロットはミータ・カーペンターを投影していると言えなくもない。

ブロットナーが伝記の中で指摘しているように，シャーロットはフォークナーがニューオリンズでシャーウッド・アンダソンらと暮していた当時の恋人ヘレンにも具体的に似ている[8]。たとえばシャーロットの "burn scar" や兄弟が新聞社に勤めていたことなど実際のヘレンにもあてはまる。*The Wild Palms* におけるハリーとシャーロットの愛は虚構の世界だが，フォークナーにとってエステラとの葛藤からのがれたいとする現実逃避を暗示している。

シャーロットが初めてハリーに出会った時兄との関係を次のように告白する。

> I liked my oldest brother the best but you can't sleep with your brother and he and Rat roomed together in school so I married Rat and now I've got two girls, and when I was seven years old I fell in the fireplace, my brother and I were fighting, and that's the scar. (p. 31)

シャーロットのやけどの傷はフォークナーがフロイトの本を読んだことがないと否定するにもかかわらず "trauma" を連想させる。この傷は彼女の欲望の象徴であり，父親のような夫からのがれ，ハリーを求めるようになる。すなわちシャーロットにとってハリーは兄の代理であり，兄妹関係の延長である。ハリーは当然そのようには考えないので二人の愛し方には微妙な違いが見られ，彼を不安にさせる。

シャーロットの夫は例の中年医師のように典型的な中産階級の人間で，とりすまして世間体を気にする小心者である。彼らはハリーやシャーロットの否定する物質至上主義の世界，すなわちブルジョワジーの化身ともいえる。シャーロットは夫に代表される現実社会のそうした抑圧に反発して，ハリーのようなナイーヴな青年に魅かれる。彼女は兄に対してできなかった自由奔放な，つまりエデンの園を追放される以前のアダムとイヴのような関係をハリーに求める。彼女は生の象徴であり，キリスト教的道徳から逸脱したディオニソス的快楽主義者でもある。

シャーロットはまた19世紀末，古い社会慣習に抑圧された女の性を解き放っ

Hosei University Repository

た Kate Chopin の衝撃的な作品である *The Awakening* (1899年出版) のヒロイン，エドナに共通した要素が数多く見られる。ブロットナーの *Faulkner: A Biography* の索引には Kate Chopin の名前は載っていないが，結婚してニューオリンズに住んで文筆活動をしていた彼女のことは耳にしていたのではないだろうか。*The Awakening* 以後，彼女は非難に嫌気をさしてか文筆活動をやめている。*The Awakening* の中でエドナ・ポンテリエール夫人は "Old Man" にも出てくるケイジャン（ルイジアナ州に住む Acadia 人の子孫）の中産階級特有のスノビズムにうんざりして，ある青年と深い仲になり愛にめざめていく。彼女はその若者に情熱を燃やすが，その愛も永続するものでないと知った時，夫や二人の娘たちを残して海の中に入って行くところでこの小説は終っている。ピューリタン的色彩の強い当時の風土では社会道徳に反するものとして発売禁止になってしまった。

エドナの自殺の原因はパトスの極限まで突き進んだからである。またシャーロットも海で死にたいという願望を抱いているのは興味深い。"I had rather drown in the ocean....."(p. 61) 水は再生のシンボルであり，すべてを清める力を持っている。エドナやシャーロットには闇の無意識的な力，すなわち Hawthorne の *The Blithedale Romance* の中でゼノヴィアを水死に追いこむものと同じような力がしのび寄っている。それはフロイトのエロスとタナトスの両極性といっても良いだろう。彼女たちは死によってしかその力からのがれることはできない。また死によってみづからの罪を清めることができると考える。エドナもシャーロットも姦通を犯し，その償いとして死を運命づけられているのだ。

トニー・タナーは『姦通の文学』の中でドニ・ド・ルージュモンの『愛について』を引用して姦通を犯したいという願望の原因について説明している。要約すると次のようである。

> 姦通を題材とする文学は古くから欧米において最も大きな関心事の一つであった。我々読者はこうした法を破る恋愛にいかに執拗に取り憑れているかを暴露し，それはおぞましい現実から逃れたいという願望のしるしではないだろうか。この病の原因をつきつめれば結婚という制度と人間の奥底には結婚を破壊せずにはおかぬ何ものかが存在する。こうした「情熱」は「暗黒」を欲し，一切を理想化された姿に変える「死」によって勝利をお

Hosei University Repository

さめるものだ[9]。

「暗黒」とは「無」ということであり，対象を失い無対象になることで，これはパトスの深化を意味する。シャーロットが出産を拒絶するのは上記の引用にあるように結婚という制度を破壊しようとする「情熱」からなのである。すなわち彼女はハリーを愛していないから出産を望まないというのではなく，出産によって再び彼女が結婚制度に組み込まれてしまうことを恐れたのである。彼女は男を愛するというよりも愛という概念に取り憑かれていた。したがって彼女はハリーに向って二人の恋人が死んでも愛は不滅だと語ることができる。

オルガ・ヴィカリーはシャーロットがハリーに堕胎手術をしてくれるように主張したのは社会的な掟だけでなく自然の掟に対する絶望的な挑戦であると説明している[10]。さらにつけ加えるならばシャーロットの自然に対する挑戦は形而上的なものであったと考えることができる。それはエドナと同様，中産階級の産物である結婚制度に対する反発であり，愛の理想（ideal）に取り憑かれた現実からの超越，すなわち「暗黒」への「情熱」である。

ハリーはシャーロットの「愛の追随者」であるが，同時に彼女は破壊的力をもつ脅威でもある。その意味で囚人の女に対する恐怖と共通している。つまり囚人にとって女は裏切り者であり，彼を破滅に導く。ハリーに対してシャーロットは，フォークナーの自然観にも通じるのであるが，母なる豊穣の大地を象徴すると同時にみづからを破滅に導くのみならず，彼女を愛する人々の生活までも破壊する。したがってマクハニーがすでに指摘しているようにシャーロットの“feminine sexuality”は“Old Man”の洪水と比較することができる。あるいはメタファーであるといってもよい。

ブルックスはフォークナーの女性観について次のように説明している。

> 女というものは，徳の源泉であり，担い手であり，また悪の主たる源泉でもある……女には習得すべき道徳律（コード）もないし――経験しなければならぬ人生開眼もない……女は自然に近い。≪女性の原理(フェミニン・プリンシプル)≫は，本能的かつ自然なものに密接に関連している。すなわち，女は典型的に倫理性（エートス）よりもむしろ情念（パトス）を表現するものである。[11]

Hosei University Repository

上の引用は *The Sound and Fury* について説明している箇所であるが，*The Wild Palms* にもあてはめることができる。ハリーはシャーロットによってイニシエイションを経験する。すなわち単に女を知ると言うだけでなく，今まで目をつぶっていた世界を知るということである。彼は女に対して献身的に愛し，その結果，すべてを失い，受難（パトス）をこうむる。しかしながらそのような苦悩を経てハリーは "between grief and nothing I will take grief" (p. 228) という境地に達する。死を否定すること，逆に言えば生の肯定であり，自己発見とエートスの表現である。「悲しみを選ぶ」ことにより自分を客観的に見つめ，シャーロットの破壊的な力——パトス（情念）を克服する。刑務所でのハリーのこのような変貌は Hawthorne の *The Marble Faun* に出てくる殺人を犯したドナテロについてのケニヨンの言葉を連想させる。

> "Sin has educated Donatello, and elevated him. Is sin, then——which we deem such a dreadful blackness in the universe——is it, like sorrow, merely an element of human education, through which we struggle to a higher and purer state than we could otherwise have attained? Did Adam fall, that we might ultimately rise to a far loftier paradise than his?"(12)

ケニヨンはドナテロの犯した罪（僧侶の殺害）を「創世記」におけるアダムの「堕落」と結びつけて「幸福な堕落」と呼ぶ。すなわちドナテロはイノセンスの喪失とひきかえに現実世界の苦悩と孤独（受難）を経験し，精神的にも道徳的にも成熟した人間に変貌する。

ハリーの場合には，彼はアダムのように女の誘惑によって姦通（adultery）や堕胎（abortion）というキリスト教道徳に反する罪を犯した。しかしそれは彼がイノセントで社会に対する責任感が欠けていたからである。彼もまた刑務所に入って精神的にも，道徳的にも成熟し，崇高なものを志向する悲劇的認識を獲得する。したがってハリーはシャーロットへの愛（パトス）を通して倫理性（エートス）を獲得する。

III

The movies could change it [title] as they did *Sanctuary*, and I

Hosei University Repository

think it is a good title. It invented itself as a title for the chapter in which Charlotte died and where Wilbourne said 'Between grief and nothing I will take grief' and which is the theme of the whole book, the convict story being just counterpoint to sharpen it.....[13]

上記の引用は1938年7月ランダム・ハウス社の Robert K. Haas にあてたフォークナーの手紙の一部である。フォークナーはここでも囚人の物語すなわち"Old Man"は"Wild Palms"を印象づけるための対位法でしかないと述べているが，注目すべきなのは原題の"If I Forgot Thee, Jerusalem,"があってこそ主題が生きてくると主張している点である。フォークナーは*The Wild Palms*の出版される前に編集者によるタイトルの変更に対して抗議している。オリジナルタイトルの重要性についてはすでにマクハニーをはじめ多くの批評家によって指摘されているように，2つの物語に"unity"を与える鍵であるはずだった。

オリジナルタイトルのもとになっている「詩編」第137章では，バビロンの捕われ人にエルサレムの地を忘れてはならないと警告している。「エレミヤ哀歌」第1章ではエルサレムは擬人法で"the daughter of zion"と表わされているように「女」を暗示する。すなわちハリーにとって女とはシャーロットであり，囚人にとっては彼を裏切った罪深き女でもある。ハリーは現実社会を超越した女に対する純粋な愛の捕われ人であるが，一方囚人は文字どおりの捕われ人で，荒れ狂うミシシッピー河（ハリーにとって現実の荒波と同時にシャーロットの"feminine sexuality"を象徴する）の中で最も恐れる女と二人きりの生活をする。女と一緒にいること自体，囚人にとって刑務所以上の不安を意味する。

囚人は20世紀ではなく，もっと古い時代だったならば英雄になっていたであろう。彼は荒れ狂う自然に立ち向い，女を救出する。しかし彼の勇敢な行為は現代の官僚主義のメカニズムによって無視されてしまう。"Old Man"の最後の箇所で囚人が"Woman——!"と一言つぶやいて，一貫して愛を否定する。刑務所は囚人にとって女からのがれる避難所（sanctuary）であったし，これからもそうであろう。この囚人の最後の言葉は"Old Man"の初めの章にある彼についての作者の次のような説明とつながりがあると思われる。"a sense

Hosei University Repository

of burning and impotent outrage" つまり "His outrage was directed at no printed word but at the paradoxical fact that he had been forced to come here of his own free choice and will." (pp. 20-21) 囚人はみづからの自由意志によって刑務所に入らざるを得なかった矛盾に満ちた現実に対してどうしようもない怒りを感じ続けた。心理学で「ダブル・バインド」という用語があるが，囚人もこうしたジレンマに陥って「二重拘束」の状態になっている。たとえ彼の思考力が幼稚で神の存在を知らないにしても，今の状況が彼に定められた運命なのかも知れないということは動物的な彼の直観力で認識していたであろう。知的能力で運命の抗しがたい力を知ったハリーとは対照的である。

女の脅威を恐れてみづから進んで刑務所に戻ってくる囚人と「悲しみを選択して」刑務所に入るハリー，フォークナーはパラドックスの効果を念頭に置いて，わざわざ2つの異なった物語を交互に表わしたと言えよう。しかし残念なことにタイトルの変更によって彼の意図は十分には伝わらなかった。

Ⅳ

フォークナーは二人の「アンチヒーロー」を対位法的に表現することによって，現代社会が直面している人間の悲劇的状況を一層際立たせることができた。一方は愛を追求し，もう一方は愛からのがれようとして「受難」を経験する。二人の主人公の物語は究極的に倫理性の獲得へ向かう。すなわち小説全体からみればパトスからエートスへという構図になっている。

フォークナーは1952年フランス人学生のインタヴューで次のように語っている。

> "Man," he [Faulkner] said gravely, "is free and he is responsible, terribly responsible.....Man is important because he possesses a moral sense. I have tremendous faith in man, in spite of all his faults and his limitations."(14)

個人的自由を放棄して，道徳的意識("a moral sense")を獲得するハリーはフォークナーの後期の作品に登場する肯定的な人物と共通の要素を持っている。1930年代後半までに書かれたフォークナーの作品に登場する主人公の多くは破

Hosei University Repository

減していく場合が多いが，*The Wild Palms* を境に傾向が変わってきている。情念を強調したそれまでの多くの作品と比較して，倫理性と調和を示唆するようになる。しかしそれはかつて *The Sound and the Fury* や *Absalom, Absalom!* といった傑作，すなわちコンプソン家やサトペン家の悲劇を生み出したエネルギーと比べると見劣りするのは否めない。それが作家フォークナーの成熟と言えるのか，それとも力の衰えと言えるのか，いずれにしてもフォークナー文学が完成に向かおうとしていると言うことであろう。*The Wild Palms* はその折り返し地点に立つ作品ではないだろうか。

注

(1) George M. O'Donnell, "Faulkner's Mythology," *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, eds. Frederic J. Hoffman and Olga Vickery (New York: Harcourt Brace Javanovich, 1963), p. 92.

Technically, the book fails; only the complementary themes connect the two parts, and the connection is not strong enough for any sort of fictional unity. Indeed, it is a pity that the two parts are printed together; for the story of Charlotte and Harry is one of Mr. Faulkner's failures, whereas the story of the convict is one of his successes.

(2) 井上謙治，「訳者解説」，『野性の棕櫚』（東京：冨山房，1968），pp. 326-29.

(3) See Thomas L. McHaney, *William Faulkner's "The Wild Palms"* (Jackson: Univ. Press of Mississippi, 1975), pp. xiii-xiv. "'If I Forget thee, Jerusalem' comes from a psalm about the Babylonian captivity; it is an admonition to remember freedom and the past. The whole psalm provides a rich context of imagery and theme, underscoring the importance of hands and cunning and preciousness of memory; emphasizing captivity; and explicitly bridging the two disparate tales which make up the novel. Unlike the substituted title, which refers to the main plot alone, the original title announces the unity of the book."

(4) Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner eds., *Faulkner in the University* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1977), p. 171.

(5) Ihab Hassan, *Radical Innocence* (Princeton: Princeton University Press, 1973), p. 45.

(6) 中村雄二郎，『術語集』（東京：岩波新書，1987），pp. 146-47.

(7) William Faulkner, *The Wild Palms* (1939; rpt. New York: Penguin Books, 1982), p. 98. 以下テキストの引用は引用文の末尾に頁数を示す。

(8) Joseph Blotner, *Faulkner: A Biography Vol. 2* (New York: Random House, 1974), p. 981.

(9) トニー・タナー，『姦通の文学』，高橋和久，御輿哲也共訳（東京：朝日出版社，1986），p. 147.

(10) Olga Vickery, *The Novel of William Faulkner* (Baton Rouge: Louisiana

Hosei University Repository

State Univ. Press, 1964), p. 164.

By her refusal to bear a child, Charlotte makes one supreme effort to circumvent nature and her own biological function. Her insistance that Harry perform an abortion is her last desperate defiance of natural as well as social law.

(11) クリアンス・ブルックス,『現代英米文学にみる神の問題』斉藤久他訳（東京：リーベル出版, 1988), pp. 40-41.

(12) Nathaniel Hawthorne, *The Marble Faun* (New York : The New American Library, 1980), p. 329.

(13) Joseph Blotner ed., *Selected Letters of William Faulkner* (New York : Vintage Books, 1978), p. 106.

(14) James B. Meriwether and Michael Millgate eds., *Lion in the Garden* (Lincoln : Univ. of Nebraska Press, 1968), pp. 70-71.